

詩人における「狂」について

——蘇軾の場合——

横山伊勢雄

はじめに

杜甫の詩に「狂夫」と題する次のような作品がある。

萬里橋西一草堂 萬里橋西の一草堂

百花潭水即滄浪 百花潭水 即ち滄浪

風含翠篠娟娟靜 風を含みて 翠篠 娟娟と靜かに

雨裏紅蕖冉冉香 雨に裏まれて紅蕖 冉冉と香し

厚祿故人書斷絕 厚祿の故人 書 斷絶し

恒饑稚子色淒涼 恒飢の稚子 色 淒涼たり

欲填溝壑惟疎放 溝壑に填せんと欲するも惟だ疎放

自笑狂夫老更狂 自から笑う 狂夫老いて更に狂なるを

この詩は表面的には自己の狂態を自嘲的にうたつてゐる。しかしよく讀めば、厚祿や名聲の社會と無縁となつたこの詩人が、貧窮と孤獨につつまれながら、自己を疎外する外界を睨み付けている眼が認められよう。中央から逐われ、兵亂を避けて秦州から同谷を経て成都にたどり着いた杜甫が浣花溪に草堂を築いたのは、上元元年（七六〇）の春で

あつた。ここにおいて杜甫は、「一小伎なる文學」に自己の存在をかける生き方を確立したのである。それは當時の知識人の常識からすればまさに「狂夫」であつた。しかし、狂者は決して自己を狂人とは認めない。その逆に自己を狂者と言う者は覺醒している人間なのである。それも「子曰く、中行を得て之と與にせずんば、必ずや狂狷か、狂者は進み取り、狷者は爲さざる所有るなり」（論語・子路篇）と、孔子が行動を共にできる人間の範疇に入れたような、常識人がやらないことを積極果敢にやつてのける主體性のある「狂者」なのである。したがつて、詩人が自己を「狂者」と規定することは、單なるポーズやレトリックでない限り、いわば「中行」から「狂狷」へと自己の生き方の變革を示すものであるはずである。かく自己の變革の志向を「狂」の語に托したとするならば、その自己認識は必ずやその思想と文學にも何らかの變化をもたらすであらう。

蘇軾の詩にも、自己を「狂」と規定する表現が一つの時

期に限つて集中的に現われてくる。これは何を意味するのであらうか。またそれは如何なる背景のもとに生まれ、かつ彼の文學に何らかの變化をもたらすものでつたのであらうか。これらの點を究明するのが本論文の目的である。

一

蘇軾の詩に、自己を「狂」とする表現を求めれば、次の四例を検索することができる。①「疎狂託聖明」②「嗟我久病狂」③「人皆笑其狂」④「嗟我本狂直」の四句がそれである。^(注1)以下に、順次その詩句を検討してみよう。

まず①の句は、「和子由初到陳州見寄」と題する二首の其一に見える。その詩は次の作品である。

道喪雖云久 道喪はれて久しと云ふと雖も

吾猶及老成 吾猶は老成に及ぶ

如今各衰晚 如今 各々 衰晩

那更治刑名 那ぞ更に刑名を治めん

懶惰便糶散 懶惰 便ち糶散

疎狂託聖明 疎狂 聖明に託す

阿奴須碌碌 阿奴 須く碌碌たるべし

門戸要全生 門戸 生を全うするを要す

この詩は弟の蘇轍（字は子由）が陳州（河南省淮陽縣）の學官として赴任した時に寄せて來た詩に和（次）韻した

作品である。蘇轍が中央を逐われて、陳州知事の張方平に招かれ、陳州の學官となつたのは、熙寧三年（一〇七〇）二月のことであつた。蘇軾のこの詩は、それからさほど遠くない時期に作られたものと考えられる。蘇軾の「初到陳州」の詩は、「謀拙身無向、歸田久未成、來陳爲懶計、傳道愧虛名、俎豆終難合、詩書強欲明、斯文吾已試、深恐誤諸生」というものであつた。この弟の思ひを受けとめながら、蘇軾は自己の思ひを寄せるべく、弟の詩に次韻したのである。

その内容を見るに、中心は時流への反撥と自己の志向の表明にあると思われる。道喪わて久しとは、當世が儒家の理想とする世とかけ難れていることをいう詩家の常套語である。老成は、おいぼれと老巧練達の人の兩面を含む。第三句の衰晩と呼應しているが、おそらく詩經、大雅、蕩の「雖無老成人、尙有典刑」の句が意識されていよう。そこから刑名法術が導き出され、新法黨の法治政策が暗示される。時に三十五歳の蘇軾と三十二歳の蘇轍が、各おの衰晩して、いまさら刑名法術の學を治め吏務をこととできようかという。強い新法黨への反撥である。時流に沿う者から見れば、我が性は懶惰、我が才は糶櫟散木の役立たず、我が振舞いは疎狂と映るであらう。ならばそれでよい。刑名と

疎狂といずれを選ぶかというなら、おのれは疎狂を選び、
晋の阿奴のごとく碌碌と風俗の中に随従して、おのが生を
全うすることを追求しよう。かく蘇軾はうたつているので
ある。儒家の道を求めてかなわぬままに衰晩したいま、む
しろ自己を無用の者としてその全生を求める莊子の生き方
へ傾斜していることの表明で、それはあつた。

なおこの時は、杜甫の詩句に見える語を多く用いてい
る。「波瀾獨老成」(贈鄭諫議十韻)「腐儒衰晚謬通籍」(題
省中院壁)「阿翁懶惰久」(示從孫濟)「樗散尙恩慈」(夔府
書懷四十韻)「狂歌託聖明」(官定後戲贈)など。ことに最
後の句などは、一字を改めたのみで、蘇軾が杜甫の狂を意
識していたことを示している。^(注2)

蘇軾の詩に「狂」の見える第二番目のものは、「穎州初
別子由」二首の其の一である。

征帆挂西風	征帆	西風に挂け
別淚滴清潁	別淚	清潁に滴たる
留連知無益	留連	は益無きを知るも
惜此須臾景	此の須臾	の景を惜しむ
我生三度別	我が生	三度の別
此別尤酸冷	此の別	尤も酸冷
念子似先君	念ふ	子は先君に似て

木訥剛且靜	木訥	剛且つ靜
寡詞眞吉人	寡詞	眞に吉人
介石乃機警	介石	乃ち機警なるを
至今天下士	今に至るまで	天下の士
去莫如子猛	去ること子の猛なるに	如くは莫し
嗟我久病狂	嗟 我れ久しく狂を病み	
意行無坎井	意行	坎井無し
有如醉且墮	酔ひ且つ墜つるが	如き有り
幸未傷輒醒	幸に未だ傷かず	輒ち醒む
從今得閑暇	今從り閑暇を得	
默坐消日永	默坐して日の永きを消さん	
作詩解子憂	詩を作りて子が憂を解き	
持用日三省	持し用つて日に三省す	

この詩は熙寧四年(一〇七一)の作である。杭州通判と
して赴任の途中、蘇軾は陳州に弟を訪ね、同道して穎州
(安徽省阜陽縣)に隱退している師歐陽脩に謁したのちに
その地で弟と別れた。九月のことであつた。別れてまもなく
この詩は作られたのである。したがつて、詩ではまず弟
との別離がうたわれている。これまで弟と三度の別離を経
験していた。嘉祐六年に蘇軾が鳳翔に赴任したとき、治平
二年に蘇轍が大名推官に赴任したとき、さらに熙寧三年に

轍が陳州學官に逐われたときの別離がそれであつた。しかし、この度の四度目の別れが最も心を痛める。それは何故か。

前回の別離は、木訥・剛直・沈靜な轍の人格を最もよく示すそのあざやかな進退ぶりに由來していた。古今において、意見を異にするために朝廷を去つた人は多いが、勇猛に決斷して速かに退いた點では、轍に及ぶものはいないと蘇軾はうたつてゐる。ことは、制置三司條例司檢詳文字の官にあつた轍が、王安石の新法の不可を論難して陳州に逐われたことをいう。それから一年餘、おのれはなお朝廷に在つた。それは「狂を病む」者に似て、前に穴があつてもその危険なことを知らずに意に任せて進んで行くような在り方であつたし、醉中に墜ちて身體を傷つけそうになつたところで、幸いに酔いから醒めたようなものであつた。かくこの一、二年の間の自己の朝廷での行動を蘇軾は「狂者」「醉者」に譬えている。しかし、彼の實際の政治行動はまさに進取の者のそれであつた。

熙寧二年二月、參知政事となつた王安石は、翌三年には同中書門下平章事となり、新法を強力に推進していつた。これに對して次々と新法を批判する論が出されたが、王安石はそれらにいずれも左遷をもつて應えた。また新法を奉

行せざる官を審察し罰した。新法を批判しては地方に追放される人々を目にしたがら、蘇軾は次々と新法の不備を論じ、その鋭い筆鋒は新法黨の憎惡の標的となつた。ついに、蘇軾が父の喪に服するため郷里に歸つた際、その往復において官吏に禁じられてゐる商行為をなしたという疑獄が起こされるに至つた。ここにおいて蘇軾は一切辯明を行なわず、ただ外任を乞ひ、杭州に通判として出されることになつたのである。このことを蘇軾は「從今得閑暇、默坐消日永」と、さりとらうたつてゐるが、新進の官僚として意欲的に政治行動をなしていつた彼にとつて、大きな挫折であつたことはまちがいない。それ故に、今回の兄弟の別離はことさらに「酸冷」であつたのである。

以上の二つの詩では、蘇軾はこれまで中央の官に在つた時の自己を「疎狂」「病狂」としてゐる。自己の意識においては決して「狂」ではないが、疎外された結果において、世間の眼を通して「狂」と客觀化してみたのである。一種の諧謔であつた。

二

蘇軾の詩に自己を「狂」とする三番目のものは、「送岑著作」と題する次の詩である。

懶者常似靜 懶者は常に靜に似たり

靜豈懶者徒 靜 豈に 懶者の徒ならんや
 拙則近於直 拙は則ち直に近し
 而直豈拙歟 而も直 豈に拙ならんや
 夫子靜且直 夫子は靜にして且つ直
 雍容時卷舒 雍容 時に卷舒たり
 嗟我復何爲 嗟 我れ復何爲ぞ
 相得歡有餘 相得て歡び餘り有り
 我本不違世 我れ本 世に違はず
 而世與我殊 而して世 我れと殊なる
 拙於林間鳩 林間の鳩よりも拙に
 懶於冰底魚 冰底の魚よりも懶なり
 人皆笑其狂 人 皆 其の狂を笑ふも
 子獨憐其愚 子 獨り 其の愚を憐む
 直者有時信 直者は時有りて信び
 靜者は終居せず 靜者は終居せず
 而我懶拙病 而して我が懶拙の病
 不受砭藥除 砭藥の除くを受けず
 臨行怪酒薄 行に臨みて酒の薄きを怪しみ
 已與別淚俱 已に別淚と俱にす
 後會豈無時 後會豈に時無からんや
 遂恐出處疎 遂に恐らくは出處疎からん

惟應故山夢 惟應に故山の夢
 隨子到吾廬 子に隨つて吾が廬に到るべし

熙寧四年十一月に、蘇軾は杭州に着任した。それからしばらく後の同五年二月に、著作郎の岑象求が梓州提舉の任に赴くのを餞送したのがこの詩である。これまで蘇軾は自己を「狂」とする詩句は弟に向けてしか示さなかつた。これから以後は、それは友人に向けても表明される。このことは蘇軾の「狂」意識の一層の深化とみなしてよいであらう。さらに、これまでの二詩では「狂」は過去の自己の政治活動に冠せられていた。この詩に至つて、「狂」は現在の自己の在り方に冠せられたものになつてゐる。

さて右の詩には、人間の二つの生き方が提示されてゐる。一つは「靜・直」という現われを持つ高人達士的なものであり、一つは「懶・拙」という現われを持ち、表面的には前者に近似するが、内實の非なるものである。時に會えば「直」は伸び、「靜」は動に轉ずるが、「懶・拙」はいかなる處方によつても改變することができない。人はそれを「狂」と笑う。しかし、おのれの「懶・拙」も本々それを求めたものではなかつた。時世と自己の志向が食い違つたために結果的にそうなつたのである。古來、多くの士人がそうであつたように、政府の官僚としての挫折を爲政者

の不明察に責をかぶせ、あるいは天命と諦め、また賢人を容れぬのは俗世の常と高踏的に構えてみることもできよう。人にはさまざまの生き方がある。「傾拙なる病」を抱き續けるのもまた一つの生き方ではあるはずだ。かく開き直つたような太さを感じられる詩である。

蘇軾が自己を「狂」とする詩の第四番目は「懷西湖寄晁美叔同年」と題する次の作である。

西湖天下景

西湖は天下の景

遊者無愚賢

遊ぶ者 愚賢と無く

深淺隨所得

深淺 得る所に隨ふ

誰能識其全

誰か能く其の全きを識らん

嗟我本狂直

嗟 我れ本 狂直

早爲世所捐

早に世の爲に捐てられ

獨專山水樂

獨り山水の樂しみを専らにす

付與寧非天

付與 寧ろ天に非ずや

三百六十寺

三百六十の寺

幽尋遂窮年

幽尋 遂に年を窮む

所至得其妙

至る所 其の妙を得

心知口難傳

心に知つて口に傳へ難し

至今清夜夢

今に至つて 清夜の夢

耳目餘芳鮮

耳目 芳鮮を餘す

君持使者節

君 使者の節を持し
風采 雲煙を燦かす

清流與碧巘

清流と碧巘と

安肯爲君妍

安んぞ肯て君が爲に妍せんや

胡不屏騎從

胡ぞ騎從を屏け

暫借僧榻眠

暫く僧榻を借りて眠り

讀我壁間詩

我が壁間の詩を讀んで

清涼洗煩煎

清涼 煩煎を洗ひ

策杖無道路

杖を策いて道路と無く

直造意所便

直に造意の便する所のままにせざる

應逢古漁父

應に古の漁父の

葦間自延緣

葦間に自から延緣するに逢ふべし

問道若有得

道を問うて若し得ること有らば

買魚勿論錢

魚を買うて錢を論ずる勿かれ

熙寧八年（一〇七五）四月の作で、前年十一月に杭州通

判から密州（山東省諸城縣）知事に轉任していた蘇軾が、自分と同年に進士及第の晁美叔（名は端彥、時に提點兩浙刑獄置司杭州）に寄せたものである。詩は清夜・清流・清涼と以後の詩に蘇軾が好んで用いる「清」の字が多用されていることが象徴するように、これまで引用した三詩とくらべて、きわめて明るい調子でうたわれている。それは杭

州在任期に、彼が一つの生き方を確立したからに外ならない。

蘇軾はこの詩においても自己の性の「狂直」の故に、早に世から捐てられたという。しかし續けて、そのために専ら山水の樂しみを極めることができたのは、天がこうした境遇を自分に與えてくれたおかげであるといっている。不運を幸運に自から轉換させようとする積極的な生き方に立たなければ、この語は出てこないであらう。あたかも永州に左遷された柳宗元が「久爲簪組累、幸此南夷謫」(溪居)と、流謫を「幸」としたように。ここにおいて蘇軾の「狂」は求樂を進取するエネルギーに擴大されたのである。

三

以上見てきたように、蘇軾は熙寧三年から同八年にかけて、詩の中に自己を「狂」とする表現を残している。それは舊法黨と新法黨の政争の中で、新法黨の政權から抑壓され疎外された状況の裏から生まれて來た意識の表明であつた。しかし、熙寧三年、四年、五年と年を経、中央から杭州に轉じ、さらに密州に轉じた熙寧八年に至る間に、その「狂」をうたう詩の色調は大きく變化している。この事實からすれば、蘇軾の内部に彼の「狂」意識の一段の深化乃至は變化が、杭州在任中の三年間の内に起こつていると考

えられる。したがつて杭州の蘇軾の表現行爲の内容を検討すれば、自然と彼の自己を「狂」とする意味と、その意識が彼の生き方にもたらしたものが明らかになるであらう。

蘇軾は太常博士直史館を以て杭州通判となつた。通判は副知事と譯されるように知州事(州の長官)の補佐役であり官秩は知州事より一段低い、權限は知州事と同じで、共同で州を治め、通判の署名がなければ知州事は決定ができなかつた。むしろ目付役と譯すべき職能の官である。杭州着任後まもなく、蘇軾が「餘杭別駕無功勞、畫堂五丈容旂旄、重樓跨空雨聲遠、屋多人少風騷騷」(戲子由)とうたうように、大きな官舎に住んでいる州政廳の高級官僚であつた。彼はこの杭州通判の任にあつて多忙な日を送る。時には管内の諸縣を巡察し、また時には運鹽河を開く工事の人夫に召集された農民を督役することもあつた。蘇軾は、新法實施下の地方の實情を具さに見聞して、それを詩にうたつた。彼の新法批判はこれまで論策や上書などの形式でなされて來たが、杭州に着任以後は詩の形式によつてなされるようになった。蘇軾にとつては詩域の擴大であり、また一貫した政治姿勢の表明であつたが、やがて彼を御史臺の獄に繋ぐ原因の一つともなつた。

一方、蘇軾は「朝推囚暮決獄、不因人喚何時休」(和蔡準

郎中見邀遊西湖」と、政務の暇を見つけては、同僚に誘われまた誘い、杭州城外の西湖や山寺に遊んで詩を作った。

この探勝と交友のことをうたう詩が、この時期には最も多い。蘇軾は杭州以前に約三百首の詩を残しているが、それらの詩にも名勝古蹟や旅での見聞をうたうものが多く、一つの特色をなしている。彼はまず文章家として出發し、詩人としての出發は遅かった。進士及第の年に母を失い、服喪の三年間は戒詩の空白があつたからである。嘉祐四年（一〇五九）の冬に上京する時の「南行集」^{（註6）}を習作とすれば、嘉祐六年十一月の鳳翔府赴任からが、彼の詩人としての眞の出發となる。しかし三年後に今度は父の服喪のため戒詩の空白がある。中央に復歸してからしばらくはほとんど詩を作っていない。したがつて南行集の時の百首近く、鳳翔での百二十餘首、都から杭州までの道中での約六十首と年月の上では飛び飛びにかたまつてことになる。ところが杭州以後は、詩が持続して作られるようになる。そして、これまで古體が大半であつた詩形に近體が多く加えられることになる。さらにこれまでの作詩の場が個人の場であり、詩の贈答の相手がほとんど弟の蘇轍だけであつたのが、杭州においては「酒社我爲敵、詩壇子有功」（元日次韻張先子野見和七夕寄華老之作）というように、杭州文壇

の文人集團の場に變わり、詩の贈答の相手が急激に増えている。その數は三十人を超え、杭州の官僚や僧侶あるいは致仕している杭州文壇の長老などが含まれている。蘇軾は、杭州文壇に積極的にとけこんで、活潑な詩作活動を始めたのであつた。

こうして杭州において作られた蘇軾の詩を、その特徴的な點からまとめてみると、次のような傾向を見出すことができる。第一は、吉祥寺・淨土寺・梵天寺など數多くの寺院で作られた詩が多いこと。それも佛教への關心からよりも、「名尋道人實自娛、……、茲遊淡薄歡有餘、到家恍如夢蘧蘧、作詩火急追亡逋、清景一失後難摹」（臘日遊孤山、訪惠勤惠思二僧）と、寺院をつつむ山水の美を楽しみ、それを詩句に繋ぎとめることが主なる目的であつた。「才者不閑拙者娛、穿巖度嶺脚力健、未厭山水相縈紆」（李杞寺丞見和前篇、復用元韻答之、再和）というように「拙」なる者にして求めうる楽しみなのである。

第二に、「六月二十七日望湖樓醉書」「夜泛西湖」「望海樓晚景」など、登樓・觀潮・船遊びなどの作が多いこと。蜀に生まれ育ち、華北に官となつていた蘇軾にとつて杭州の美景は創作意欲をそそるものであつたであろうが、より重要なことは、「寒食未明至湖上、太守不來、兩縣令先在」と

いつた詩題が示すように、これらの詩作の場には同僚や友人が同席していたことである。「五月十日、與呂仲甫・周邵・僧惠勤・惠思・清順・可久・惟肅・義詮同泛湖遊北山」と杭州の詩僧が加わる場合もあつた。この詩には「清風洗昏翳、晚景分穠纖、縹緲朱樓人、斜陽半疎簾」のまことに美麗な表現の句が見られ、詩の競作にエネルギーを注いでいる蘇軾の姿がうかがわれる。第三は、右の點と重なるが、「李鈴轄坐上分題戴花」の題に見るように、詩會の席上で作られた詩があることである。これも古の六朝や唐代の貴族達の雅會を模倣した文人達の遊びの會であつて、詩の競作を楽しむことに主眼があつたものと思われる。^(注7)蘇軾がこうした詩作の場を持つたことは、彼の詩業にとつて大きな意義を有すると考えてよいであらう。それは、從來の彼の詩がおおむね孤獨な場で作られ、表現が古硬で内容が理窟っぽい傾向にあつたのに、この杭州期以後は表現が洗練されてのびやかになり、内容に説理の傾向は残つてはいるものの巧みに情感のオブラートに包まれて詩情が豊かになつていくからである。

最後には、次韻の詩がきわめて多くなる點が一つの特徴的な傾向といえる。極端な場合には、前に引いた詩題のように蘇軾の孤山に遊ぶ詩に李杞が和韻し、それに元韻で蘇

軾が答え、さらに再び和韻するという數度の次韻による詩のやりとりが見られる。同じ韻字を用いて詩を作ること、は、相手の詩を尊重し親しさを表わすことでもあつた。また「吉祥寺花將落而述古不至」「述古聞之明日即至坐上復用前韻同賦」の詩題は、詩が蘇軾と知州事陳述古との間で手紙の役割を果たしていることをも示している。「和人求筆迹」の詩は、蘇軾の書を無心した人への返事であつた。

以上に列舉したことに共通していることは、いずれも詩を通して杭州の人と自然に結びついている點である。杭州における蘇軾の詩は、山水の美を楽しむ歡びの歌であり、杭州に居る人々との交歡の道具であつた。

四

このことは古今體の詩ばかりではなく、詞のジャンルにおいても言えることである。蘇軾は杭州に着任してから、詞名の高かつた張先と交わるうちに詞作に手を染め、やがて宋詞に一派を聞くに至る。しかし、杭州期に關を切つたように作られる多くの詞は、座興的な色彩が濃いものであつた。^(注8)

さらに蘇軾の書は杭州においても既に有名であつた。熙寧二年に作られた「石蒼舒醉墨堂」の詩に、「我書意造本無法、點畫信手煩推求、胡爲議論獨見假、隻字片紙皆藏收」

と見え、意にまかせ手にまかせた書が隻字片紙まで人々に愛蔵されていた。「和人求筆跡」「王頤赴建州錢監、求詩及草書」などの詩は、杭州においても彼の書が珍重されていたことを示している。また繪畫については、熙寧三年に「送文與可守陵州」の詩に「君知遠別懷抱惡、時遣墨君解我愁」というように、水墨畫の名手文同から強い影響を受け、さらに熙寧四年の「歐陽少師令賦所畜石屏」の詩に「古來畫師非俗士、摹寫物象略與詩人同」という文人畫意識を示していた。自からも墨竹をよくし、文人畫の旗頭となる蘇軾の活動もまた杭州期においてであつた。なお、彼の詩の一つの特色となる題畫詩も「寄題刁景純藏春塢」の作に見るようにこの時期から始まる。また、「胡穆秀才遺古銅器、似鼎而小、上有兩柱可以覆、而不蹶以爲鼎則不足、疑其飲器也、胡有詩答之」「和錢安道寄惠建茶」「李頎秀才善畫山、以兩軸見寄、仍有詩次韻答之」などの詩に見る古器・茶・畫軸の贈答、「玉堂硯銘」の文に見る墨硯愛好など、幅広い趣味生活とそれを詩にうたうこともこの時期から顯著となるものであつた。

このように蘇軾は杭州期において詩文・詞・書畫など多面的な創作活動に入り、豊かな趣味品愛好を始めた。一方において官僚として政務を執り、新法への政治批判を続け

ていた。まさに宋代士大夫の典型となる全人的な文化活動の開始であつた。彼のこうした活動を支えていた思想は何であつたか。それは人は多面的な楽しみを追求することにおいてこそ人生の充實をなしうるという蘇軾の持論を基本とする求樂の思想であつた。それは「士大夫捐親戚豪墳墓以從官於四方者、用力之餘、亦欲取樂、此人至情也」(上皇帝書)と官吏にも許さるべきものと蘇軾は考えていた。彼は對立者に中央を逐われるという一つの挫折を経験したが、それは「盛衰哀樂兩須臾、何用多憂心鬱紆」(遊靈隱寺、得來詩復用前韻)「世事徐觀眞夢寐、人生不信長轆軻」(送蔡冠卿知饒州)あるいは「黃雞催曉不須愁、老盡世人非我獨」(與臨安令宗人同年劇飲)という普遍・循環などの巨視的樂觀によつて解消されていたのである。そこには「物化逝不留、我興爲嗟咨、便當勤秉燭、爲樂戒暮遲」(秋懷)という積極的な求樂が相互作用としてあつた。

以上述べてきたように、蘇軾は都から杭州に轉任するとともに積極的に多面的な創作活動を開始した。それと表裏して彼は、従来の政治活動に精神を集中していた自己を「狂」であつたと規定し、さらに人生の充實を求めて生きている歡びを積極的に追求する自己をもまた「狂」あるいは「懶拙」と規定した。ここには自己を疎外する政治社會

に對しての逆説的な意味も含まれているが、彼の杭州での行動と併せ考えれば、それはやはり新しい自己の生き方を表明するものであつたのである。^(注9)ただ、杜甫における「狂」が彼の純一な詩人としての出發を意味したのに對し、蘇軾のそれは「文人」としての新しい生き方の出發を意味したのである。多才の文人として、生きる歡びを詩文・書畫など多面的な表現形式をもつて表現し続ける文人蘇軾の誕生であつた。從來は筆禍事件による黃州流罪をもつて、蘇軾の生涯における劃期とみなすのが一般であるが、杭州に逐われた三年間が文人としての彼にはより大きな意義をもつていたと見るべきであらう。なお、文人という語を用いたが、彼においては藝術は政治の餘暇になされるものであつて、藝術至上主義の眞の文人には到つていない。それは元末民初の詩人であり畫家であつた無官の文人倪瓚において始めて確立されるのであるが、懶瓚あるいは倪迂と號したこの文人はやはり自己を「狂」とした。彼の「題自畫」の詩には次のようにうたつてゐる。

東海有病夫 東海に病夫有り
自云繆且迂 自から云ふ繆^{くも}且迂^{おろか}なりと
書壁寫絹楮 壁に書し 絹楮に寫すは
豈其狂之餘 豈に其れ狂の餘なるか

蘇軾を好んだこの文人の「狂」の意識の檢討は後の機會にゆずるが、詩人における「狂」が一つの系譜を持ち、徐々に文人意識を形成させて、中世の詩人から近世の文人へと展開していつたことが推測される。蘇軾の「狂」は、こうした文人意識の祖型を生み出したものとして考えられるのではなからうか。^(注10) (本學講師)

(注1) 蘇詩の中には「狂語・狂言・狂歌・狂吟」など「狂」を冠した語が十數例見出せるが、必ずしも自己について言うものではないので、ここでは省略した。

(注2) この時期に蘇軾が杜甫に關心を拂つていたことは、外任が決まつた熙寧四年七月の作に「次韻張安道讀杜詩」があることによつても知られる。

(注3) 宋史や續資治通鑑長編によれば、熙寧二年六月より、呂誨・劉琦・錢顗・孫昌齡などの御史中丞や侍御史が新法を批判して左遷され、熙寧三年には孫覺・呂公著・李常・張戢などが次々と左遷された。

(注4) 拙稿「蘇軾の政治批判の詩について」(漢文學會々報第三三十一號) 參照。

(注5) 蘇軾の詩文に朝廷を誹謗するものがあるとして、彼が御史臺の獄に繋がれたのは元豐二年(一〇七九)八月である。この筆禍事件については、注4に掲げた拙稿を參照された。

(注6) 拙稿「蘇軾の『南行集』について」(漢文學會々報第三

十二號) 參照。

(注7) 蘇詩の「會客有美堂、周邠長官與數僧同泛湖、往北山湖中、聞堂上歌笑聲、以詩見寄、因和二首、時周有服」と題する作は、吳山の巔にある有美堂に會したさまをうたつてゐる。有美堂での作は、「與述古自有美堂乘月夜歸」「有美堂暴雨」の詩もある。

(注8) 蘇軾の詞については拙稿「東坡詞論考——作詞の場と作品の分析——」(東京教育大學文學部紀要 第十八輯) 參照。

(注9) 政治と藝術の比重における價值意識の轉換がなければ、この二つの「狂」は出てこないであらう。そして政治活動を「狂」であり「假」なる行爲であるとすれば、残された藝術活動が「眞」なるものとなるはずである。しかし、あくまで官職にあり、政治を第一義とすべき士大夫たる蘇軾には、政治一般を「狂」なるものと言ひ切ることとはできない。それは自己の政治行爲のみに限定されるしかないのである。またそのことの故に、意識の上ではより「眞」なるものとする藝術活動をも「狂」なるものと呼ばざるを得ない。つまりこの「狂」は未だ普遍化できないものであつて、いづれをも個人における「狂」と規定することからうじて成立しているのである。世に無用の懶拙者として構えなければ、政治から藝術への傾斜は困難であつた。蘇軾の「狂」の二面性はこうした基盤の上に成立していると考えられる。

(注10) 倪瓚が杜甫と蘇軾に傾倒していたことは、兩者に言及する詩句が彼の「倪雲林先生詩集」に多く見られることによつ

て知られる。彼は白衣の一市民として終始したため政治と藝術の軋轢からは逃れ得ているが、なお儒教による社會規範に對して「狂夫」として身構へることを要求されたのである。勿論そこには元朝の異民族支配に對する抵抗の姿勢も含まれており、彼の「狂」意識も決して單純ではない。